令和6年度
北海道教育大学
附属函館幼稚園だより
NO．８【号】

多様性

北海道教育大学附属函館幼稚園長　五十嵐　靖夫

「えんちょうせんせい，かくれんぼしよう」・・・「いいよ，どこでする？」

「おへやのなか」と園児言うので，私が「園長先生ふとっているからお部屋だと隠れるところがないよ」と言うと「うーん・・・じゃあ，えんちょうせんせいがオニをやって」と園児が言いました。なるほど！

園児は私が仲間外れにならず，かくれんぼに参加できる方法を考えてくれました。普段からみんなと一緒に遊んでいる園児にとっては当たり前のことなのかもしれませんが，これこそが多様性を認めることだと思います。園児たちが多様性を認めていると感じたことは以前にもありました。昨年度，誰もが楽しめるスポーツのボッチャを通して附属特別支援学校小学部の児童とはな組の園児が交流を行いました。特別支援学校の児童が園児にボッチャを教える活動だったのですが，園児たちはいつもと変わらない様子で，まるでつき組，ゆき組のお兄さんやお姉さんと接するように児童と交流をしていました。この時も園児たちが多様性を受け入れてると感じたのです。ひょっとすると幼児期の子どもは，もともと多様性を受け入れていて，学校で学ぶようになってから学校社会の中にみられる様々な差異を気にするようになるのかもしれません。気にするようにさせているのは先生や大人たちなのかもしれません。

「ふたりのももたろう」という絵本があります。よく知られたももたろうと，鬼に育てられたもう一人のももたろうが登場し，ラストシーンは二人のももたろうが出会う場面です。ある日，鬼の子ももたろうが「自分の頭にはツノがない」とぽろぽろ涙を流します。ここで鬼たちがかけた言葉が「ちがってもいいじゃないか，ももたろうのちょんまげもすてきだぜ」と声をかけるのです。違いを認めることで，多様性について考える物語になっています。この絵本を思い出し，園児たちがいつまでも，さまざまな違いを認めあうことを忘れずにいてほしいと切に願っています。

お部屋の中でもかくれんぼができるように痩せなくちゃ・・・。